関西大學新報

発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通2
電話(358)2271
発行人　大月基
編集人　大月基
(一部10円)

古書籍全般売買
天牛本店
淀屋橋中央前
電話(231)三五八一九番

敗北から組織改編で
ソヴィエト運動への飛躍を

東大安田砦決戦からちょうど一年。70年代階級闘争の新たな攻勢の端緒を切り開くべく新左翼諸潮流が苦悩している。60年代後半の爆発は静かな70年代の幕開けの底に重く、不気味なまでの深さを持って横たわっている。われわれは60年代のとりわけ69年に濃縮された日本階級闘争のイメージを、そして極端なまでに登りつめたスローガンを、現在の沈黙の中で具体化する事業を展しているのである。

全共闘運動の位置・任務

67年10月8日の第一次羽田闘争と、陣地化としての内容を持つようになった。関大闘争が展開されたのはこの時期であった。また次官通達、大学管理法など、政府ブルジョアジーの攻勢が強くなり「正常化」のアラシが吹きまくった時期でもあった。そして高揚した全国学園闘争は、昨年秋の「安保決戦」の敗北とともに休閉期に入った。

全国学園闘争は、表面的に、極めて表面的に見るならば以上のような過程を経ている。それでは、この激しく燃えたかった三年間に何が呼ばれ、何が追究されたのか何を創り出し、あるいは覆滅し何が死んでいったのか。

この間の闘争の主役は、全学連全共闘、それに反戦派労働者であろう。

強固な政治党派として組織された全学連と、闘争の中核部隊となった全共闘（大学で平連を含めて）は一線を画して語られねばならないのは当然であり、この両者における闘争の担撮は問題にされなければならないだろう。すなわちベトナム反戦を大衆的なスローガンの基軸にしながら、安保闘争を準備した政治党派による、学園ー街頭政治闘争と、現代資本主義社会における、管理機構的、制度的矛盾、「不合理」を、大学に顕視的に把え、その事によって対政府ブルジョアジーとの非和解的な学園闘争を、そして支配体制によって再び体制補完物としての「学内左翼」に治党派が解体、再編に苦悩している現在、あらためて、全共闘部隊自分からに問い直されているのではないだろうか。つまり「大学変革」を「大学解体」に書き変え、そしてその内容をまさしく社会体制の絶対的変革として深化させたように、自己ヒマン的な「全共闘的実存」「マルクス主義的実存」を形成していく全共闘は、明確に、学園闘争の渦中で、二つの流れを持っていたといえる。もちろん、両者とも、日米安保体制打破から、帝国主義の打倒までスローガンを深化させたが、この過程には全学連を中心とする政治党派部分による闘争・戦術の先取りと、政治党派による全共闘組織から、党派部分が全共闘に吸収されていくという事実があった。巨視的には、新左翼が質的に拡大されていくことになったといえるだろう。

政治党派を乗り越えながら闘争を展開した全共闘であったが、全国学園闘争の規模的にも質的にも天王山であった東大闘争が生み出した「自己否定」の論理が、諸政治党派の再生産の場、資本の要請に応えた技術者〝研究者ー学者〟の生産の場としての大学を拒否するという事であり、その事を通して、今日の制度としての大学を、帝国主義、ブルジョアイデオロギーと共に、狩り出そうとするものであり「帝国主義は死滅する」ことによって、今日の制度としての大学が死滅する事を示した。

「60年代が徹底した破壊で、70年は創造の時代」という人がいる。60年代新左翼の問題は、拒否されず、否定されるべきは何か、であったのだ。全共闘運動はこのように思想運動としての側面を多分に持ちながら戦術的には、政治党派の行動部隊としての位置にあったといえるだろう。

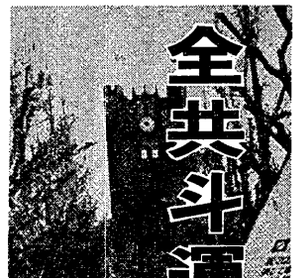
全共闘の組織と大衆武装

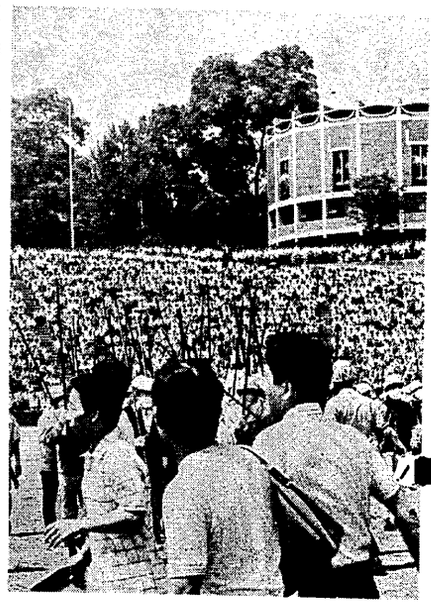
しかしながら、日大、東大、京大をはじめとする全国学園闘争が、こうした思想運動として獲得していき内容は、その高揚の過程に於いて、戦術面に於けるところの武装闘争へと大衆化したのであり、敗北とはいえ、10・21から11・17までの秋の決戦を中核的にささえたところの大衆的火炎ビン闘争を実現した。全共闘武装部隊という武装解除によって、10月ー11月の街頭政治闘争に全共闘は武装部隊として登上し得なかったのみならず政治党派の武装への結合も進行せず大衆武装は事実上実現不可能となったといえる。

全共闘運動の現在的到達点とその内包する矛盾をまとめると、第一に、全共闘運動の全過程が明らかにしたものは、学生大衆の個別要求の実現のためにも、既成の自治会組織ではなくて、新しいソヴィエト型組織が必要であり、こうした組織型態の故に、大衆の自然発生性を即自的に吸引し、自らの武装に終始したといえる。すなわち、全共闘の武装闘争はあくまで学園占拠を軸にしての合可能であったこと、いかに闘争が尖鋭化しても全共闘のもつ闘争組織としての性格が組織の自然成長性を自らで克服する事ができないという事である。即ち闘争型態の先鋭化が先行し、それを荷う主体、つまり組織と人間の階級性の未成熟が、もっとも大きな限界として立ち現われてきたのである。換言すれば、組織の矛盾が武装闘争の局面に至って全面的に表われてきたのである。そして今二つの要因は全国全共闘結成の課題であったこの組織矛盾を止揚する時点において、秋の決戦を前にした国家権力の予防反革命が全面的に展開され、学園陣地の武装解除と解体、全共闘の武装解除が着手して進行した10月ー11月闘争の前段に於いてほぼ解体された全共闘は、昨年秋民主主義に基づく国家権力からの形式的相対的自立性」と社会的生産関係における特殊性（直接生産過程と分離した労働力商品製造工場）に規定されており、ブルジョア的民主主義が、支配原則として貫徹している限においては、一定の権力の空白地帯を形成していること、従って権力闘争の時代において、それが権力闘争の単なる一部分でしかなく、党派の革命運動と直結するものではないこと、第四に、加えて学生の存在形態（物的生産性から分離したプチブル、インテリ性）のもつ有利な条件としての論理性、抽象性の故に、闘争形態が不断に尖鋭化した大衆的実力闘争から、大衆武装へと容易に展開したのであるが、先述したように闘争形態の尖鋭性とそれを担う主体の形成との不均衡、形態の先行と内実の展開の矛盾を止揚することが困難であり、その矛盾を解決するための運動形態を創出する以前に、反革命暴力に武装解除され、自らの弱点を露呈したのである。

この事はしかし、大衆の自然発生性を、全共闘武装によって、広範に引き起こすことを追求し、その事で低迷の中にも乗り越えようとした政治党派の安保決戦を不発に終らせ、さらには、この冬の、革命党派の、大衆領導を完全ににぶらせてしまったのである。全共闘運動の過大評価をなした党派は、自らをも、単純な〝団体〟形成へと走らせざるをえなかったと

(次号二〇号二頁に続く)





気軽なあなたの
金融機関
質「むかでや」
天六バス操車場横　TEL(351)9527

論説

70年代年明けて
我々がとり組むべきは何か

日本帝国主義云々いろいろな呼び名で呼ばれた政府権力が、同じ戦いをくり返す者達に対して、新しい戦いを展開した。60年代のパワーに対し、総括を行ない70年代を考えてみよう。

政府権力は、政治・経済あらゆるものを通じ、人間の意識そのものを変革するといった、一般に人間疎外といわれるものを作り出した。

そして、それは、学園においても教育のあり方、学生のあり方等、あらゆるものに対し学生の反乱を誘発したし、職場においても労働運動をエスカレートさせてきた。

しかし、一般に語られた「人間疎外」は、これら問題を数多く残し、それに対し、いろいろな闘争が組まれたが、一方、「人間疎外」を黒いベールに包み数々の闘いを非情にも弾圧する口実ともなっていたのではないだろうか。つまり、「昭和元禄」等、市民社会は、楽しく語られた一面があった。

政府権力は、機動隊による武力弾圧、大学立法その他に見られる法的弾圧等の他に、人間そのものの意識を精神的に弾圧した。

そこには、人間としての教育も行動も、思考も許されない、人間ロボットとしての人間の存在が許されるにすぎない。

60年安保に始まり、佐藤訪米阻止闘争まで、あらゆる闘いの変遷は、学園における民主化闘争、賃金値上げ等の労働運動といった類いの戦いが、全国いたる所で戦われ、学習され、エスカレートして来た。しかし、これらの戦いに対し、政府権力はあらゆる弾圧を誤せて来た。

60年代のほとんどの闘いはこの形態を持っていたと思う。そしてこれ迄、前に述べたように、精神的にも、物理的にも政北したことは確かであり、はっきりと総括すべきことであろう。

しかし、60年代の政府の高度成長経済政策における、生活の矛盾と人間疎外、また、アメリカ帝国主義の東南アジア支配の一環としての、ベトナム侵略、それに対する、全世界人民の蜂起と、反乱、アメリカ帝国内部における、ブラックパワー、黒い蜂起の出現、中南米＝キューバに代表する、革命戦、アフリカ大陸に対する各国の侵略と、独立戦線、ふきみた、革命の不偏性を押し進めて行く中国等々、世界情勢の緊迫する中で、日本国内では、敗北したありきたりの闘争から、街頭政治闘争へと発展して来て、それは、全国全共闘連合の結成により、学生運動は、全国の拠点大学、高校において、バリケードストの貫徹という任務を御出し、また青年労働者によるところの反戦青年委員会を全国いたるところに組織を作り、武力をもっても戦いを辞さないところまで来たべ平連等も組織無き組織を持ち市民運動を展開する。これらは社会党＝総評、あるいは日共＝民青に依るところの学生運動や労働運動の、その敗北ともいの炎を上げたと言える。それは明らかに先鋭化された政治闘争で、対政府権力闘争をはっきりと位置づけたものである。

つまり、請願的な運動ではなく闘争的な、反乱形態を創出しつつあると言える。

これは全国の人民が、激しい動揺の中で勝ち得た、すべてではないだろうか。この60年代の総括は、70年代への展望を許す唯一のものであり、70年代はシンショナリズムを越えた人間の闘いの不偏性が見える。権力の武力には人民の武力を持って対抗する、そしてそれは、プロレタリアを最大限に表現し、ヘゲモニーを勝ち取り、闘いをさらに推進するものであろう。

二つの世界は、激しい勢いで崩壊をよぎなくされ、その非人間的な帝国主義性を露呈したことによる。侵略と抑圧は、世界の人民を反乱に蜂起させることは必然であろう。前にも述べた様にこのことは70年代にますます顕著化し、細分化され、新たに統一的傾向を見せるであろう。

関西大学における闘争の既略を総括すると、昨年二月の社会学部封鎖及び、六月における、千里山全学共闘会議の結成、それは学園の戦いと同時に、街頭における、戦いを平行させて進められるといった方式をとった。その全共闘における戦いは、長い間つちかわれて来た政府権力＝学校当局＝体育会執行部、といったファッショ的体制と、学内民主化をとなえつつ、なんら大たんな解決策を見出すことなく"黙殺"を続ける、日共＝民青（全支）とのなれ合いのもとにあった関大の内実に、具体的な、鋭いメスを入れた。

天六学舎においても、ある程度の動揺と、高揚が、数度に及ぶ、学生大会と、自主的な集会によってうかがわれたが、関大二部における特殊性、労働者であり学生でもあるといった特殊性の二点が政府＝権力と共に強い障害として存在したがゆえに、決定的な闘争をにないきることができなかったと言える。

しかし、学友会執行部の意識と惰落、困迷、日共＝民青（全支）の思想的失墜の中にあっても、明確な闘争形態を打ち出すことができなかったことは、あまりに既成全共闘運動理論に固執したためであったと、むしろ否定的に総括すべきである。

何も解決のきっかけを見せず、何ら政治的見解を出さずして断末魔的に崩壊した。しかし、それは、60年代の種々の経験を通じ、70年代への新たな挑戦を準備しつつあるのだということを少なくとも意識しているのだということを、忘れてはならない。

それは、闘争の目的が、「安保」でも「沖縄」でもない、その様なありとあらゆる闘争を勝ち取りつつ、その者自身のかかわり方を学び、どの様な思想を自己のものとするのか……と言ったことをふまえより一層強固なものとして、展開しなければならない。

それは、昨年来、口ぐせのように語られたことだが、今までは、あらゆる闘争が、自己目的化した。所でのみ闘われて来たがため、数々の無意味な敗北と、消耗をくり返してきた。このことをはっきり認識し、総括した中で、70年代初期の闘争にかかわらねばならない。

70年代は、ありとあらゆる矛盾と、激動が世界的に予想される。しかし、それは、60年代のそれと変わる所なく、権力により、すべてが無便に抹殺されようとするであろう、ゆえに、自己の確立を急き、学ばねばならない。そしてそれはおのずとアジアへ、アフリカへ、中南米へ、米帝内部へ、世界中いたる所の諸矛盾に対し、より強いかかわりを示すことになる。

基本的に、この様な態度でもって、世界中へ、階級的な、不屈的な連帯を求めて、あらゆる闘いに勝利して行かねばならない。

現在、60年代の問題と、それにかかわった闘争が、質的に大きく変化しようとしていることを明確に整理し、70年代は、世界的な諸矛盾に、対抗する決意を固めねばならない。

―定期学生大会―
執行部不信任動議で流会
組織改編に向け再度の運動構築を

一月十九日、上半期間の総括を議題とした定期学生大会が三一〇教室で開かれた。大会は、前期活動報告審議中に定足数不足で九時前に流会した。あいも変わらぬ、関大学生自治の姿を示している。

大会前の自治委員会で、議案書を審議不足のまま、執行部側が強行採決した事も重って学生大会は当初から、民青＝全支のつき上げで始った。開会時の八時頃出席者は三三〇余名で成立。前期活動報告の審議に入った。

しかし、中教審・大学立法粉砕闘争の総括、全共闘―二闘委の「暴力学生」批難等、執行部の報告書の不備、さらには議長不信任動議が出された。そして八時半頃には、全支等、執行部に反対の側より、執行部不信任動議が提出されるに至った。しかしこの時にすでに出席者は定足の約三百人を割る二一〇余人であり、一斉が不問のまま流会した。

明きらかに、学友会権力にあぐらをかく、体育会執行部と、学生大衆の代弁者としての民青―全支系の"政治的かけひき"の中にしか、関大天六の学生自治が存在せず、しかも学生大会定数の三百にも満たない学生の場に失望していることを如実に示していると言えるだろう。

我々は、関大闘争（天六）が、広汎な大衆組織が達成されなかったことも総括しつつ、四〇％程度の選挙投票率、三百名前後の学生大会で、全く、形式しか残っていない、学生自治―ポッダム自治会の根底的な改革を迫られていると言える。

まさに数年間にわたって構築されてきた、学園―国家への闘いの陣地を、われわれ学生大衆は、自らの大学学生自治を、ソヴィエト理の評議会運動へと向け、その自らを組織していくことこそ、この70年代階級闘争への第一歩としてある。

現在の、学友会機構の改編による、学部、学科を基軸とした闘争機関、大衆組織の連合体としての学友会―執行委（事務局）への結集と、各組織のイデオロギー闘争を展開することによっての運動の構築が計られる必要があるだろう「イデオロギーを越えた（抜きにしての）」組織としての学友会は、目下、60年代階級闘争が明らかにした如く、政治・軍事の時代としての今日、何ら問題を止揚することは不可能と言っても良いのではなかろうか。イデオロギー闘争の提起と、その組織化を担い、運動の先端に立つ学友会組織の確立でもって、再度、関大体制の下からの切り崩しを展開する必要があろう。

「敵は米帝と本土政府だ」
―全軍労基地包囲ストを決行―

四十五年一月七・八日の第一波四十八時間スト、一月十八日から二十三日までの第二波五日間ストは、数名の解雇者を出しただけで第三波ストと沖縄のゼネスト体制をよぎなくされている。

沖縄それは、数百年の神秘、現代に到る、悲劇、住民はあらゆる"敵"に対して戦ってきた。その形態は、歴史と共に、太平洋戦争の如く、質的に違った戦いを強いられた。しかし、今は住民の内からの戦い、住民の精神生活というきわめて人間的な戦いに端を発した"大日本帝国の敗北"は住民にはかり知れない断絶と空虚を与えるに至り、そう上、その荒廃の中から起ち上り復興を目指した住民を本土人民と同じく"日米安全保障条約"により、日帝の再編をたくらんむ政府自民党は、米帝に売り渡し"米軍基地"を押しつけるという大戦中とあまりにも似かよった。あまりにも過酷な手段を選んだ。

しかし、人は、追害されつつも繁栄を少しでも許されるなら、それを甘んじて受ける。沖縄も例外ではない、種々の戦いは、すべて否定すべき内容であったことは、総括できるであろう。が一方的にそうのみみるのは危険である。その（ナンセンスながら）種々の戦いから、今見られる、大きく質的に変革した戦い形態が生まれつつあるのだから…その質的な変革は○反戦の意識が非常に強い○基地労働と生活を依存しなければならない、という二つの大きく矛盾した立場にありながら「解雇処分反対」の斗争をエスカレートするにつれ、その大きな矛盾との斗いを同時につきつけられる状態に到る。

これを克復する手段は、いったいどうすれば良いのか、第3次防衛計画実現の為、空前の防衛費の増額をすれば良いのか……現在の闘いを決定的にエスカレートさせ、労働者が勝利する内容を導く為には、多大の犠牲と、学習が必要である。それは労働者が自ら作り出し、屈辱を否定しなければならない。

毎年四月二十八日は「沖縄デー」として全国で闘われている。しかしそれは一定の高揚を生むだけである。今月一月七・八日の「全軍労」による第一波スト、十八日から五日間にわたる第二波スト、労働者のピケ破も米帝の銃剣に押し返えされそうになり、踏みとまろうとする、団交は無味を失う、回答は過酷で非情なものであった。

結局沖縄は一人で、闘っているのだ、それが与えられた、最後のものの様に…

われわれは、沖縄と同じではないのだろうか、全く違ったものではないはずだ、われわれは、同じような状況が、チャンスが、内容があるのだ、それは労働者階級という意識と、それを否定できるまでの斗い、学生であることを自己否定することによって得られる本質的なものをもってする斗い。

それは、全沖縄住民と連帯し、同一次元で斗うことなるのだ。

沖縄住民は決して一人で斗ってはならない。我々と同じくして斗っているのだと言うことをはっきりと意識しなければならない。

全沖縄軍労組は今まで第三波スト態勢を編制している。一月二十七日の会議では、県労協、復帰協などの支援団体と、全県民的規模の闘いを設定する方針である。

第三波ストの日時については未決定であるが、態勢が整い次第ストに入るみこみ。

第二波ストを、①解雇、処分撤回から新たな政治課題へ移った。②米軍、日本政府の基地労働者への弾圧が明らかになった。ことを総括し、第三波ストはさらに強化される見通しだ。しかし、支援団体間の方針のずれ、闘争の位置づけが食い違い、本土における、新左翼、旧左翼との対立的な空気が形成されていく可能性が強い。米軍基地縮小、日帝の沖縄前線基地化阻止、安保粉砕の闘いと、全軍労の経済闘争とがおり合わず、「経済闘争を埋没させはしないか」という声もある。

金労闘争の第三波スト態勢は、本土の全職労の闘いに影響することも必死で、この微妙な動きが注目される。

二、三年前、あるいは今いくらかなごりを残してはいるが、サークル・パートの、大会員としての姿が消えてゆきつつある。これと並行して、サークル内における造反、離争が起ってきている。この動きは未成熟ではあるが、今後の学友会内二大勢力の勢衝状況の打破にどう動くかが注目されるだろう。関大のヤングパワーともいえる存在としてある。一部でも、文化団体連合会を中心に同じような動きが活発であり、この両者の結合も望まれる。

教科書・参考書はお揃いですか？

あなた自身の学問の充実を！

書籍・文房具・事務用品

関大生協外販部天六